

浄土真宗の二種廻向について

武 田 晋

はじめに

浄土真宗が二種の回向により成り立っていることは「教巻」冒頭に

つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。

と示されている事により頭かであるが、その往相の回向として私の前に現前するものとして教・行・信・証がある。また、「証巻」に

それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまへるところにあらざることあることなし。因、淨なるがゆゑに果また淨なり。知るべしとなり。

と述べている事から、教・行・信・証は阿弥陀如来の清淨願心の回向成就した大悲回向の利益である事がわかる。しか

も、この往相回向だけではなく、『高僧和讃』に

弥陀の回向成就して／往相還相ふたつなり／これらの回向によりてこそ／心行ともにえしむなれ

と述べられ、『正像末和讃』に

無始流転の苦をすてて／無上涅槃を期すること／如来二種の回向の／恩徳まことに謝しがたし

と述べられ、『三経往生文類』に

如来の二種の回向によりて、真実の信樂をうる人は、かならず正定聚の位に住するがゆゑに他力と申すなり。……

と示されるように、二種回向の恩徳により心行を獲、二種回向によつて私が難思議往生に向かつて生きるといふ仏道の捉え方をしている。しかしながら、従来これらの二種の回向は、往相は私の往生する姿（相）、還相は『論註』に説かれるごとく、未来の私の還來穢国の相として私の時間的前後に捉えられている事が多い。既にこの事は寺川俊昭氏¹⁾などにより指摘されるところであるが、多くの『本典』注釈書などは殆

どこのような捉え方をしている。⁽²⁾例えば、本派本願寺の『浄土真宗聖典』註釈版の補註の十二「他力・本願力回向」には回向を解釈して

往相とは、衆生が浄土に往生していく因果のすがたであって、教を与え行信の因を与え証果を与えていくことである。還相とは、証果を開いたものが大悲をおこして菩薩のすがたとなって、十方の衆生を救うためにこの世に還り来るすがたであるが、それもまた阿弥陀仏の第二十二願によって与えられたすがたである。

と示されている。私は私が信心獲得し往生浄土する過程において、私自身の相の時間的な前後にこのような過程があるとの捉え方を否定するものではない。しかしながら、往相・還相をそのように私の時間的前後の「相」として捉えるのは正しいのであろうか。そこで小論では、親鸞がどのように二種回向を捉えたかをその定義を中心として窺う事とする。

一 回向と欲生心

往相の回向については「行巻」冒頭には「往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。（中略）また諸仏咨嗟の願と名づく、また往相回向の願と名づくべし」と述べ、「信巻」には「往相信心の願」と述べ、「証巻」冒頭には「往相回向の心行を獲れば、即のときに大乘正定聚の数に入るなり」と示されて、「行巻」・「信巻」・「証巻」にわたり往相回向のはた

らきを明かにしている。また、還相回向については、「証巻」の後半に

二つに還相の回向といふは、すなはちこれ利他教化地の益なり。すなはちこれ必至補処の願より出でたり。また一生補処の願と名づく。また還相回向の願と名づくべきなり。『註論』に顕れたり。ゆゑに願文を出さず。『論の註』を披くべし。

と述べられる。それでは親鸞は「回向」という事を『教行信証』においてどのように捉えて説示しているのであろうか。

ここで注目されるのが「信巻」欲生心釈である。字訓釈では「欲生」を「大悲回向心」と明かし、仏意釈では「回向心」と明かしている。また、本願の欲生心成就の文として第十八願成就文の後半を示して「至心に回向したまえり」と読み引用し、曇鸞が『論註』の中で、世親が『浄土論』の中で提示した五念門の一つである「回向」について、それを二種の相に展開して解釈した文章を次のように読みかえて引用しているのである。

回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。往相とは、おのれが功德をもつて一切衆生に回施したまひて、作願してともにかの阿弥陀如来の安樂浄土に往生せしめたまふなり。還相とは、かの土に生じをはりて、奢摩他毘婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、ともに仏道に向らしめたまふなり。もしは往、もしは還、みな衆生を抜

いて生死海を渡せんがためにしたまへり。このゆゑに（回向為首得成就大悲心故）とのたまへり

と。これを『浄土真宗聖典』（七祖篇）よつて『論註』の当面の読みでみると、

回向に二種の相有り。……往相とは、己が功德を以て一切衆生に回施して、共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せむと作願するなり。還相とは、彼の土に生じ已りて、奢摩他・毗婆舍那を得、方便力成就すれば、生死の稠林に回入して一切衆生を教化して、共に仏道に向かふなり。……

となり、『論註』当面では回向の主体は菩薩であり、菩薩は回向の行を行ずるときに、苦悩する衆生を教化して生死流転を超えさせようとするとき、そのはたらに往相・還相という二つの側面（相）から行ぜられるのだと語っている事となる。また『論註』では回向に二種の相があると語られるが、親鸞は二種の回向ありとする点に留意する必要がある。

二 往相回向の定義

では、親鸞の捉えた往相回向とはどのように定義づける事ができるのであろう。先ず第一点として「己我功德をもつて一切衆生に回施したまう」という事が挙げられる。これについては何故親鸞が「欲生我国」の生まれんと欲えの心を「回向心」と捉えたのが問題となる。

浄土真宗の二種回向について（武田）

欲生といふは、すなはちこれ如来、諸有の群生を招喚したまふの勅命なり。すなはち真実の信樂をもつて欲生の体とするなり。まことにこれ大小・凡聖、定散自力の回向にあらず。ゆゑに不回向と名づくるなり。しかるに微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海に漂没して、真実の回向心なし、清浄の回向心なし、このゆゑに如来、一切苦悩の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、乃至一念・刹那も、回向心を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに、利他真実の欲生心をもつて諸有海に回施したまへり。欲生すなはちこれ回向心なり。これすなはち大悲心なるがゆゑに、疑蓋雜はることなし。

と示されるように、真実の回向心なく、清浄の回向心ない衆生に利他真実の欲生心で招喚しているのが如来の願心であると理解し、回向の主体を全く如来においたのである。このように本願の三心「至心・信樂・欲生」のすべてを同じく如来の大悲心と親鸞は了解しているのである。『尊号真像銘文』には

「欲生我国」といふは、他力の至心信樂のころをもつて安楽浄土に生れんとおもへとなり。

と述べ、「欲生我国」成就文の「至心回向」について『一念多念文意』には

「至心回向」といふは、「至心」は真実といふことばなり、真実は阿弥陀如来の御ころなり。「回向」は、本願の名号をもつて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。

と示して、回向の具体相として名号が衆生にはあたえられているのである。この如來の尊号たる名号を釈して「行巻」には、「帰命は、本願招喚の勅命なり」と示されており、欲生心との關係が指摘できよう。

次に、第二の定義としては、「作願して共にかの阿弥陀如來の安樂浄土に往生せしめたまう」という事が考えられる。

親鸞は『論註』の読みをかえて、このように読んだのであるが、「往生せしめたまう」といわれる事より往相回向の「往相」が、「往生浄土せしめる相」と理解でき、この相に教・行・信・証があるのである。

三 還相回向の定義

では、還相回向はどのように定義づけられるのであろう。

第一点として、還相回向は「利他教化地の益」という事である。利他が行ぜられる場所が教化地であるが、「証巻」には菩薩の出第五門を示し

『浄土論』にはく、「出第五門とは、大慈悲をもつて一切苦惱の衆生を觀察して、応化の身を示す。生死の園、煩惱の林のなかに回入して、神通に遊戲して教化地に至る。本願力の回向をもつてのゆゑに。これを出第五門と名づく」と。以上

とある事より、教化地とは煩惱の園であり、教化地はすなはちこれ菩薩の自娛樂の地なり。このゆゑに出門を

園林遊戲地門と称すと。

と示されるように、還相回向とは、利他教化地に立つた菩薩に恵まれる自在なる利他活動となる。流転し苦惱する衆生を救うという阿弥陀如來の利他の行を、阿弥陀如來を増上縁として浄土の菩薩が自在の教化において行ずるのである。そのはたらきにより受ける利益を還相回向の利益（恩徳）と親鸞は捉えたのである。

また、還相回向定義の第二点として、親鸞の第二十二願の読みが指摘できる。この二十二願は次の二十三願から三十願までの菩薩行の元となる願であると指摘され、これらは華嚴經典群からの影響である事が指摘されるが、親鸞はこの願を

たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが國に來生して究竟じてかならず一生補処に至らん。その本願の自在の所化、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱せしめ、諸仏の國に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如來を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずは正覺を取らじ。

と、「行巻」・「証巻」に二十二願を引いて読んでゐる。この願が「一生補処の願」と理解されたのは前半分の意味からであるが、これを還相回向の願とみたのは「その本願の自在の所化」以下の文の内容に重点を置いたからである。また、本

来ならば「普賢の徳を修習せんをば除く」と読み、梵本でもそのように読むようであるが、上記のように読む事により、「遊諸仏国・供養諸仏・開化衆生」という菩薩行を普賢の徳と同格として扱っている。つまりこの還相回向の願によれば、無上涅槃の功徳を背景として、無量の衆生の生きるところに出ていって、衆生を開化し、無上正眞の道に立たしめるという方向で菩薩の行が行じられる事となる。このようなはたらきをなし、応化身を示すという事からすると、還相菩薩を現在の私の姿で語るという事は不可能であろう。では、親鸞はどのような方々を還相の菩薩と捉えたのかであるが、先の二十二願の成就文が『浄土文類聚鈔』に引かれているのであるが、その直後に「総序」の文にあるように提婆・阿闍世・韋提の名や「証卷」末の言葉を連ねるのである。また、「化身土巻」には利他教化地・方便権門の道路として聖道門を明かし、『末灯鈔』に

聖道といふは、すでに仏に成りたまへる人の、われらがころをすすめんがために、仏心宗・真言宗・法華宗・華嚴宗・三論宗等の大乗至極の教なり。

と示され、これら浄土真宗以外の仏道を行じる人々をも還相菩薩に定義してもよいという捉え方もある。これは往相は眞実法であるが、還相には方便権化としての還相法を含むという考え方である。

結論

親鸞は二種回向により成り立つ仏道として浄土真宗を捉えている。この回向の相を私の相（婆）の時間的前後に重ねて、回向の往相還相の「相」という事をみる事は親鸞の意に添わないように思われる。「相」は回向の相と捉えるべきであろう。そして、親鸞が二種回向は如来の大悲心の欲生心を根拠としている点、その往相回向のはたらきによって衆生に回施され現前する恩徳が眞実の教・行・信・証として捉えられている点をはっきり押さえる必要があろう。また、社会的実践という事から自らを利他行を実践する還相菩薩であると語ろうとする発展的理解があるが、私自身を還相菩薩と語るのは不可能であろうと考える。

- 1 寺川俊昭『親鸞の信のダイナミックス―往還二種回向の仏道―』（草光舎、平成五年十二月一日初版）
- 2 最近の注釈書の中で、「相」を回向の相として捉えているのは、宗学院編『本典研鑽集記』（永田文昌堂）くらいであるが、『真宗叢書』二巻所収の真宗百論題集の「往還回向」の題下における、先哲の解釈をみると、「相」を弥陀回向する回向の「相」と理解する説は専精院（鮮妙）師（一八三五一一九一四）だけである。
- 3 宇野恵教「普賢行としての還相回向」（宗学院論集六十二号）尚、引文の注記はすべて省略した。

〈キーワード〉二種回向、欲生心、往相の定義、還相の定義

（浄土真宗本願寺派宗学院客員研究員）